Nara Women's University

【内容の要旨及び審査の結果の要旨】漢代の着装に関する総合的研究-長沙馬王堆一号漢墓出土の長衣を資料として-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-01-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 水野,夏子, 岩崎,雅美, 佐原,康夫, 加須屋,誠, 武藤,康弘 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/1290

氏名（本籍）	水野夏子　（大阪府）
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博課第367号
学位授与年月日	平成20年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間文化研究科
論文題目	漢代の着装に関する総合的研究 －長沙馬王堆一号漢墓出土の長衣を資料として－
論文審査委員	（委員長）教授　岩崎雅美　教授　佐原康夫 准教授　加須屋　誠　准教授　武藤康弘

論文内容の要旨

中国・湖南省長沙市で1972年に発見された馬王堆一号漢墓は、長沙国丞相を務めた軑侯利蒼の妻の墓である。近辺からは利蒼の墓（二号墓）と子息の墓（三号墓）も発掘されたが、盗掘や腐朽のために資料として扱いにくいものである。一号墓は文帝一五（前165）年前後に造られたもので、未盗掘で服飾資料の保存が極めて良く、漢墓随一の資料と称されている。副葬品は1000点を超え、染色品は130点に及ぶ。服飾には衣衾・袷・綿入・単衣・裙・足袋・履・手袋・枕・組帯等の多種類があり、1973年に刊行された『長沙馬王堆一號漢墓』（以下、『報告書』）に詳細に説明されている。

衣服では大別して“曲裾袍”と“直裾袍”と呼ばれる高級な長衣が出土している。本研究ではこの二種の長衣に焦点を当て、衣服の要因としての構成の他に、着装を形成する立ち姿や体形、腰紐の位置と長さ、装飾文様の配置や表現内容など服飾と着装を総合的に捉え、漢代の服飾の一つの特徴を明らかにすることを目的とした。着装の手がかりとして図像や俑の服装を参考にしている。研究方法は、報告書から“曲裾袍”と“直裾袍”を二分の一の大きさで複製し、図像資料や俑の着衣を参考にして着装を復元した。その過程で多くの考察が可能である。他に文献史料との照合、“曲裾袍”と“直裾袍”の比較、他の副葬品である器物の文様との比較、湖南省博物館における実物資料の観察などから研究を進めた。

第1章では“曲裾袍”を取り上げて衣服の構成や着装から、その特徴を考察した。“曲裾袍”の素材・刺繍・裁断方法・大きさなどをみると、大量の絹を用いて必要以上に大きく仕上げられ、斜め布の多用と細かい裁断がみられる。刺繍を施す場合は地文に重ねて刺繍を行い、外観からは寄裂である

ことを感じさせないように配慮されている。寄裂については文献の記述にも見られるが、これらを総合すると着用者の奢侈を表すものであることが判明した。“曲裾袍”は 巻き付けにより着装する衣服で、巻き付け部分に影響する部位は布を斜めに用い、影響しない部位では布を縦地に使うという布目を考えた裁断方法がみられ、直立ではなく前傾に腰を屈める立ち姿が実現する。これは図像や俑の姿に似た姿である。また袖の形には袖丈の長いものや細い筒袖状のものなどがあり、一定ではなかった可能性が考えられる。腰紐は、複製の着装から上前の先端が回ってくる臀部下で結ぶと安定する。これも図像や俑の姿に類似の姿になり、紐の位置が不安定ながらも立ち姿の体の線に適った位置であることが明らかになった。腰まわり寸法は着装から70cm位になり、図像や俑の姿に似た姿になるが現実的でない細さである。図像や俑は細い腰という当時の美意識に沿って描かれた可能性があり、実物の腰まわりとは異なるものと考えられる。

第2章では“直裾袍”を取り上げ、複製により構成や着装の特徴を考察した。文献史料によれば“直裾袍”は“曲裾袍”より価値が低く贅沢さに欠け、常服の役割も果たすと記されている。しかし、“直裾袍”も必要以上に大きく仕立てられ、高級な素材が用いられていることや、俑の立派な着衣の様子などから“直裾袍”も奢侈で盛装に向いた衣服である可能性も考えられる。裾の縁飾りの丈は40cmに及ぶ長いものである。この縁飾りの接ぎの位置は膝上部分に当たること、膝丈に合わせて長くなっていること、これが当時の立ち姿に適応して歩行や起居振舞いに便利であったことなどを考察した。“直裾袍”の捺染と手書きの文様にも、単位の目立つ部分の配置を整え、接ぎ目がわからないように配慮するという“曲裾袍”の刺繍と同じ工夫が見える。また素材・文様、袖の形、着丈、縁飾り・下部の線の入れ方にも幾つかの種類があった可能性が考えられる。“曲裾袍”と衣服形態の異なる“直裾袍”も腰紐は臀部下の位置で結び、腰まわり寸法は、着装から70cm（または70cm以下）になることが判明した。実際にこのような細い腰が存在したとしたら、俑のような姿が実現する。俑ではさらに裾広がりの姿に造られていることから、当時の美意識である腰の細さを一層強調した造形と考えられる。

第3章ではまず報告書を基にして、木棺や漆器などの他の器物の装飾文様の特色を考察した。四重の木棺について、内棺の上にある帛画から外棺に向かうごとに龍が雲気化し、具象から抽象へと変化し、不死や神仙の世界に導く信仰や思想を表現したものと考察した。染織品については雲気文と菱形文の表現内容及び相関性を検討し、長衣の文様の表現内容を考察した。染織品を木棺の具象的図案と詳細に照合した結果、染織品の雲気文が木棺のそれらと同形式のもので構成されていることが判明した。染織品の雲気文は木棺の雲気文が表現している世界を凝縮・簡素化したもので、表現内容は昇仙過程という世界観であると考察した。雲気文にある動物の目や頭状の要素は文献史料の記述等から、龍の目や頭を示したものと考えられる。菱形を神山とすれば、菱形の織文様に雲気の刺繍が重ねられていること等が合理的に説明でき、雲気文と組み合わさった場合には昇仙過程がさらに強調される。

“曲裾袍”には雲気文、菱形文、菱形の要素が強い幾何学文、そして雲気と菱形の二重文様が使われ、“直裾袍”の植物文では植物の要素を主要にして単位の輪郭を菱形に造っている。二種の長衣には漢代の昇仙への強い信仰心や墓主を昇仙させるという願いが表れている。

本研究では、馬王堆一号漢墓の長衣の構成や着装そのものの特徴を考察しただけでなく、当時の人体や姿勢などとの関わりも含めて考察した。しかし、衣服の形・素材・文様における特色、図像や俑の着衣との比較など検討の余地が認められる。今後はさらに本墓の単衣・裙など他の衣服との対比から、長衣の着装を検討する必要もあると考えられる。

論文審査の結果の要旨

中国・漢代（前202～後220年）の諸文化が、その後の中国大陸のみならず朝鮮半島や日本などにも影響を与えたことは周知の通りである。1972年に湖南省長沙市で発見された馬王堆一号漢墓は、年代が文帝15（前165）年前後であること、未盗掘で副葬品が1000点を超えること、保存状態が良いことなどから漢代の超一級資料と称されている。染織品についてみると、発掘品は約130点に及び、服種では衣衾・袷・綿入・単衣・裙・足袋・履・手袋・枕・組帯など多種が含まれている。1973年には詳細な発掘報告書・『長沙馬王堆一號漢墓』（以下、『報告書』）が刊行された。服飾に関連した内容をみても、材質・布組織・刺繍の技法・衣服の構成図などが詳細に記されている。このような状況から、馬王堆一号漢墓の発掘品そのものに関する先行研究は多くみられるが、服飾を着装と結びつけて漢代の服装を考察した研究は極めて少なく、そこに本研究の意義が見出される。

論文提出者は『報告書』を基本資料とし、漢代服飾に関する文献・図像・俑などを参考にし、さらに2005年度から二度にわたり実物資料が保存されている湖南省博物館を訪れ、実際の発掘資料から報告書の不明な点を補うと共に、服飾研究者の視点から資料を再調査している。本研究の特色はまずその研究方法に認められる。衣服の複製を試み、衣服の表裏や構造を分析し、使用された布の方向性や縫製などから服飾研究者ならではの視点を駆使している。但し、複製が二分の一の大きさであったことが惜しまれる。全体の着装を調べるのに実物大に勝るものは無いからである。しかし、複製はあくまでも研究の手段であり、ここから得られる情報は本研究の成果に大きく貢献している。特に複製の衣服をそれにふさわしい人体に着装させることから、逆に着用者の体形、姿勢、着装の詳細な様子などが浮び上がるからである。具体的な衣服には“曲裾袍”と“直裾袍”と呼ばれる二種の長衣を例とし、俑や画像の着装を参考にしながら立ち姿の姿勢や腰紐の位置や周りの大きさなどを考察している。服飾に関する当時の文献史料は少ないが、可能な限り参考にしている。さらに文様に関しては他の副葬品の文様を視野に入れ、馬王堆一号漢墓の文様の特色を明らかにしている。

第１章では11点の“曲裾袍”の中から「信期繍褐羅綺綿袍」を取り上げ、各部位の様子がわかるように色を変えて複製を行っている。“曲裾袍”の素材・刺繍・裁断方法・全体の大きさなどをみると、大量の絹を用いて必要以上に大きく仕上げられ、斜め布の多用や細かい布の寄裂仕立てであることなどが明らかになる。刺繍が施される場合は、地文に重ねて刺繍を行い、外観からは寄裂であることを感じさせないような配慮もみられる。寄裂については文献にも記述がみられるが、これらを総合して着用者の奢侈を表す盛装の服飾であることを考察している。この種の袍には巻付けに直接影響する部位には斜め布を使用し、影響しない部位には縦地を用いるなど、着衣を考慮した裁断法がみられる。

着装の状況から、姿勢が直立ではなく前傾に腰を屈める立ち姿であることを明らかにしている。腰紐は上前の先端が回ってくる臀部下で結ばれることを確かめ、この位置が「細い腰」を形づくる重要なポイントになっていると指摘している。しかし腰周りの寸法が70cmという小さいものであり、当時の画像や俑の立ち姿とは合致する姿ではあるが現実離れしていて解明が十分でない。

第2章では“直裾袍”3点の中から「印花敷彩黄紗綿袍」を取り上げている。「印花敷彩」とは捺染と手書きにより文様が施されているという意味である。従来“直裾袍”は“曲裾袍”より価値が低く贅沢さに欠け、常服の役割も果たすと考えられてきたが、現存資料の材質や俑の着衣状況などから、盛装用衣服にも着られた可能性を考察している。“直裾袍”の構成上の特色は、裾線が水平であること、裾の「縁飾り」と報告されている部分の丈が40cmにも及ぶ長い寸法であることである。複製の着装から「縁飾り」の接ぎの位置が膝上の部位にあたることや、そのことから歩行や起居振舞いに便利であったことを考察している。さらに裾の広がりが腰の細さを強調し、“曲裾袍”と同じ傾向を有していることを見出している。ただし、第1・2章と関連して腰の細さの考察において、俑を時には漢代の服装美の理想と考えたり、時には現実の服装のように解釈している部分があり、もう少し慎重な考察が望まれる。

第3章では木棺や漆器などの副葬品の文様を視野に入れ、四重の木棺について内棺の上にある帛画から外棺に向かうごとに龍が雲気化し、具象から抽象へと変化して死者を不死や神仙の世界に導く信仰や思想を表現したものであるという考察は興味深いものである。染織品の文様について、雲気文や菱形文が木棺に描かれた文様と同形式であることを見出し、菱形が神山を表すことを立証し、菱形の織文様の上に雲気文様の刺繍を重ねることで、染織品においても昇仙過程を表現していると考察している。二種の袍の文様が昇仙への強い信仰心や墓主を昇仙させるという願いの表現であるという考察は、馬王堆一号漢墓ならではの特色であろう。

本論の主要な部分は国際服飾学会・服飾美学会等での発表後、以下の学会誌等に掲載されている(一部審査中)。第1章：「馬王堆一号漢墓出土『信期繡褐羅綺綿袍』」の構成と着装に関する一考察」『国際服飾学会誌』(No.30、2006).「漢代着装考－馬王堆一号漢墓出土の“曲裾袍”の復元製作より－」『古代日本と東アジア世界』奈良女子大学21世紀COEプログラム報告集Vol.6、奈良女子大学21世紀COEプログラム「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」(2005). 第2章：「馬王堆一号漢墓出土の“直裾袍”の構成と着装について－複製を手がかりに－」(審査中)『家政学研究』(2008). 第3章：「馬王堆一号漢墓出土の染織品における雲気文と菱形文について」『服飾美学』(第45号、2007).「漢代雲気文の表現的考察－長沙馬王堆一号漢墓を中心に－」『人間文化研究科年報』(第20号、2005)